E 41　現代の家庭組織および家庭機能論序説

広島女学院大短大　林　雄太郎

目的　国際化と技術革新および情報化の現象は、大企業のみでなく中小企業や家庭にまで影響を与える時代となり、家庭の組織および機能の変化がみられるが、今後の家庭組織と家庭の機能の変化の方向と、その基となる組織論について論究したい。

方法　家庭生活（組織を含む）は、社会の進化に適合するものでなければならないが、家庭と社会との、組織と機能の関連を調べるために、ある面で類似な性格（実践的）を持つと思われ、近年特にプロの仕事として社会的に認識されて来た「秘書」と比較し、社会が秘書に要求する能力、換言すれば「秘書学」と「家政原論」を比較すると共に、そこから今後の家庭組織と機能を診断するためオープン・システム論をもって展開した。

結論　家政学は、総合科学であり、応用科学であり、実践科学であり、秘書学は、総合的、経営的、倫理的、実践的な総合科学あり、両者の共通点の多い事が論証された。　また、今日までの多くの組織論は、あらゆる環境に普遍的に妥当する理論が中心であったが、今日では、技術や規模および文化などと云った環境が変化すれば、有効な組織は変化すると云う理論が提唱されるようになった。秘書の機能および秘書の所属する機関も、環境条件が変化すれば当然変化し、組織の維持と発展を考えるのである。よって、家庭の組織と機能も環境条件の変化に伴って変化することが判明した。　その組織と機能の変化態についても報告したい。